

鎮井祭の周辺

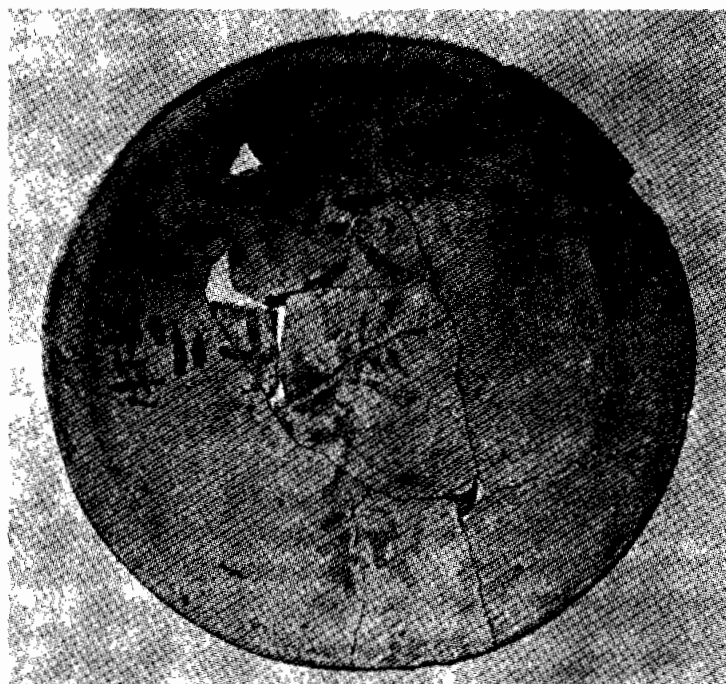
上代の日本には、鎮魂祭、鎮花祭、鎮火祭、鎮土公祭というように数多くの「鎮めのまつり」がとり行なわれている。鎮めの思惟は、生活のリズムがよってたつ重要な基盤に弱まりなり危機が訪れる、そうした非常の事態に対応して、鎮め、和めて正常な姿に恢復させようとする、そうした意図のもとに息づくものである。たとえば、人々の魂に魂を鎮める秘儀を通じて新しく魂を得てよみがえりの春を迎える、こうした一連の想ひと行為が鎮魂祭であった。想えば、屋敷のなりたちには地鎮め、建物の建て初めには鎮壇、家の完成にあたっては屋敷のまつりがあるように、人の居処としての屋敷地は、まさに「鎮めのまつり」の横溢する場であった。居住にかかせぬ井戸と竈も生活のリズムの根源をなすものとして、常に強く意識され、その清浄と正常が求められて来た。『延喜式』などでも「御井并御竈祭」と記されているように両者への共通した心くばりはまことに強いものがあり、「鎮めのまつり」の重要な一劇を構成している。考古学の世界から、こうした井・竈の一部、井をめぐって、掘穿時の鎮めなり井の汚染による清浄への鎮めを通じて人の心根を見、その鎮めの世界とその周辺をたどることしよう。

*水 野 正 好

昭和四七年、高槻市清福寺町にある式内社阿久都神社の南側、参道のすぐ西に接した八八七番地で発掘調査が行なわれた。この調査で平安時代の中頃に営まれた一基の井戸が発見された。井戸は、南北三・四畧、東西三畧ばかりの方形で三・四畧も掘り下げた大きな掘り穴の中に、多くの石を積み上げて、口で一・五畧×一・三畧、底で〇・八×〇・九五畧、深さは三・四畧の規模で造り上げられている。この井戸は、井の底に暗灰色の泥土層が堆積し、層中に多くの生活遺品が混入しており使用時の姿を垣間見せている。使用が絶えて後は、一斉に埋め立てられたと見え茶褐色の、殆んど品物を含まない土が井口まで入っていたという。

ところで、この井戸で注目を惹くものに、井底にあった二枚の皿、斎串、櫛、桃核といった一群―「まつり」とかわる品々の存在が挙げられる。まず、二枚の土師(素焼)質の皿から述べよう。一枚は口径一四寸、高さ二・七寸、完全な形をしており、皿の内表中央に大きく「天璽大神王」と墨書し、その左側に直角に、中央から縁へ向ひ「十二神王」とや、小振りに墨書されている。いま一枚も口径は同じ

図1 高槻市・阿久都神社参道・井戸発見墨書土器(二点)



く一四^ニ、丈けはや、低く二・五^ニ。完全な形であり、皿の内表中央に、左から右へ、「中央土公水神王」「西方土公水神王」「東方土公水神王」「南方土公水神王」「北方土公水神王」と五行に記し、内、「南方土公水神王」の一行のみが他の四行と異り天地を転じ逆書している。これら五行は、中央の「東方土公水神王」の文字が最も高く書かれ、左右とも頭字を遞落させる形で記されており興味をひく。五行の土公水神王の周縁をとりまく形、言い換えれば、皿の口にそわせ、「封」の字を一二めぐらす。左下の部分、「中央土公水神王」の文字が口にまで及んでいる部分のみは、この封字を見ない。こうした文字の配置からするならば、最初の皿は、先ず「天罡大神王」が書かれ、次いで「十二神王」の文字が書かれたこと、第二の皿では、中央の「東方土公水神王」にはじまり右の「南方土公水神王」から、左の「西方土公水神王」、転じて右の「北方土公水神王」、左「中央土公水神王」と書かれ、つづいて左から右へと「封」字を連ねていったことが知られるのである。この封字の下に三度筆をためて引いた圈線が見られることも注意すべきことであろう。次に、この二枚の墨書皿と相關するかと思える品々の存在が指摘される。若干の同質の小皿は共用された可能性が強いし、幅一・二^ニ、長さ一七・一^ニの斎串一点も頭の両脇の削りこみに幣帛や木綿をとりつけた斎串であり、井戸底に挿したてた例もあるだけに共用される場が浮かび上る。その他、多量のツゲ製の横櫛、桃核の存在も、全てとは言えないまでも関連し合う「まつりの具」であった可能性は強い。

昭和五十六年三月、調査を担当した高槻市教育委員会から『嶋上郡衙跡発掘調査概要・五』として、この一井と遺品が報告され、ここにその全容が明きらかとなった。想えば、この一井とその遺品の語るところは極めて大きいものがある。報告書では、「井戸を新しく構築した

際に、水に住む神を祀ってその怒りを鎮め、井戸の水が枯れないように祈念する祭祀に用いられたもの、陰陽五行説から導びかれるものである。具体的には二枚の皿を合せ口にして紐で結え、土器の中に天罡神・水神王などの神々を封じ込め、井戸に沈めたもの」という藤沢一夫先生の明確な所説を掲げている。簡要にして正確、適切な所説である。ここに「井戸をめぐる鎮めのまつり」が登場することとなるのである。

二

まず、二枚の皿の中の一、天罡大神王と中央に書き、左に直角に十二神王と記す皿をめぐる検討しよう。天罡大神王の名は聞きなれない神王名であり、十二神王の名も一見その内容が明確でない。しかし、土公を中心とする祭式―土公供に關連する諸書を繙くことによって、その内容が窺えるようになるのである。私の手許には、河内千手寺の木下密運師より惠贈を受けた『土公供次第』と題する一本の写しがある。いま、この一書の一部を抄出しよう。

謹請大梵王帝釈天衆十二神廿八宿神卅六祇神王神

散供再拝

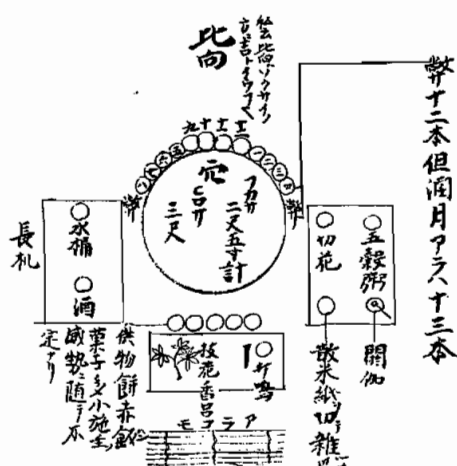
謹請正月徵明二月河魁三月從魁四月傳送五月小吉六月勝先七月大一月八月天罡九月大衝十月功曹十一月大吉十二月神后

この一文は、同書に記す大中臣祭文に係る文である。土公供を行なうに当って大中臣祭文を奏上するが、その際、まず五方五帝天地日月五星三台玉女神を謹請し、つづいてこの一文の記事となり、大梵王帝釈天衆十二神廿八宿神卅六祇神王を謹請するところである。同書では、このあと、再び散供再拝したのち簡略化した大祓の祝詞を記しその奏上があったことを伝えている。

十二神の語が土公供の中に息づいていることがここに明きらかとなった。この十二神については『唐六典』十四・太卜署の項に

凡式占并三式之同異、一日雷公式、二日太乙式並蔡私家蓄、三日六壬式土庶通用之、凡用式之法……又辨十二將十二月神。十二將以天一為首、前一日滕蛇二朱雀三六合四句陳五青龍、後一日天后二太陰三玄武四太常五白獸六天空、前盡於五後盡於六、天一立中為十二將又有十二月之神、正月登明二月天魁三月從魁四月傳送五月小吉六月勝先七月太卜八月天潤九月太衝十月功曹十一月大吉十二月神后とあり、十二將とは区別される十二月神であることが知られる。式占のうち唐では土庶の間で用いられる六壬占（六壬式）に登場する神である。六壬占は年月日時、行年方位の支干を推し四課十二將十二神を并じて占うものであり、中古、陰陽寮では神祇官の龜卜と相並んでこの占法を盛んに用いたとされている。十二神王は、こうした式占の十二月神であり、十二神とも呼ばれた神々である。こうした内容が判ると『土公供次第』の中に、大梵王帝釈天衆十二神とあり、散供再拜ののち謹請正月微明二月河魁……とある文意は、十二神を再度読み上げ謹請しているものであることが判るのである。ところで、土公祭に謹請される神にこうした十二神があることは注目すべきことであり、『土公供次第』では、土公供―地鎮めに当り広さ三尺深さ二尺五寸程の円穴を穿ち、この穴の東に四（一一四）西に四（五一一）北に四（九一一）本の幣をたて、南から散礼する状を図示している。この

十二本の幣は高さ二尺五寸、各幣に銀錢十二文を加えることなどを記し、さらに「幣十二本但潤月アラハ十三本」と書きとめて居り、幣の十二本が十二月になぞらえられていることを示している。恐らく、土公供の中核となる円穴の東にたつ四本の幣は北より一月微明にはじまり四月傳送、西の四本の幣は北から五月小吉より八月天罡、北の四本



『土公供作法』所掲土公供祭場図

の幣は西から九月大衝にはじまり十二月神后に至る神名が付されているものと考えられるのである。土公供に謹請される十二神の神名とその具現の姿である十二本の幣の存在を考え合せると、この高槻市阿久都神社南の一井発見の土師質の皿に書かれた十二神王の語から、穿井―井鎮めに当り土公供と同様、十二月神―十二神王を謹請し、十二幣を挿し樹てるといった場なり次第のあった可能性が推察されてくるのである。

ところで、この土師質の皿では、十二神王の語はあくまでも脇役であり、中心となるものは天罡大神王の句である。神王の上に大の字を加えることからもうした事情は容易に読みとれるであろう。天罡大神王の語は、私の囁みしない神王名であるが、恐らく、呪符に屢々見出される天罡―天罡星をさす言葉であろうと考えられる。天罡星は北

斗星をいい『天官書』では恒星を中官、東官、南官、西官、北官と五官に分け、中官には中核に太一星、天帝が居し、北斗星は天帝の乗車として天の中央をめぐり四方を統一すると記している。天帝の意を伝えるもの、実修させるものとして北斗星の機能が与えられているのである。太一真君は左手に北斗星の柄を握り、右手では北極星を握るとされているように、太一星—太一真君の描く世界の中核を形成する星として、神王として北斗星—天罡大神王が息づいていたのである。『延喜式』に見える東文忌寸部献横刀時呪に「謹請皇天帝、三極大君、日月星辰、八方諸神、司命司籍、左東王父、右西王母、五方五帝」と謹請する諸神格を記しているが、天罡大神王は、皇天上帝、三極大君、日月星辰という中で重要な位置を占め、七政の枢機、万物の精命と観じられていたのである。静岡県浜松市の伊場遺跡では、宜天罡真符の語を記しとどめる「百惟咒符」の発見があり、七世紀後半にはすでに天罡をめぐる呪符の成立していることが知られる上、四天王寺蔵の丙子椒林の銘をもつ七星剣、星座と北斗を描く飛鳥高松塚古墳の存在など先行する天罡の諸例が知られるのである。天罡大神王に十二神王を配したこの皿は陰陽師が井戸の鎮めに当たり謹請すべき諸神を記したものと考えるべきであろう。

三

二枚の皿の中、いま一枚の皿に見る墨書の神王を次に検討しよう。東方土公水神王にはじまり、南方、西方、北方、中央土公水神王と順次、土公水神王が各方位に配されていることが注目される。土公水神王が土公と水神王であることは言うまでもないところであろう。こうした配置を見る時、再び『土公供次第』が想起されるのである。同書の大中臣祭文の項には、まず最初に謹請すべき神として、

謹請東方甲乙青帝龍王 謹請南方丙丁赤帝龍王 謹請西方庚辛白帝龍王 謹請北方壬癸黑帝龍王 謹請中央戊己黃帝龍王 謹請天地日月五星三台玉女神

の一文が頭初に見られるのである。まず注目されるのは、皿に見える各神の記順が東・南・西・北・中央となるであろうと考えたのであるが、この土公供次第でも同様の配列をとることである。いま祭文の世界で同様な例を求めると著名な元興寺極楽坊発見の夫婦和合・離別祭文でも、「謹請東方和合青帝將軍、謹請南方和合赤帝將軍、謹請西方和合白帝將軍……」と言うように東・南・西・北・中央・上・下方と順次各將軍を掲げている。このことは、当時、東・南・西・北・中央といった方位の順位観があり、その順次に従って神々を謹請したことを物語っているのである。言うなれば謹請する神々を順次に従って読み上げ謹請する、そうした表現を示すものである。阿久都神社南の一井から発見されたこの皿には謹請の文字はないが、謹請すべき神謹請された神々を記したものであることは言うまでもないところであろう。

ところで、東方土公水神王の表現は、『土公供次第』では「東方甲乙青帝龍王」といった形をとっている。一見複雑化しているが東方の句は共通し、帝は土公に、龍王は水神王に共通し、僅かに甲乙の干支と青の方位が加われば『土公供次第』の表現に一致することとなるのである。従って、東方土公水神王は東方青帝龍王と通ずるものと言えよう。恐らく青帝龍王といった語義が固定するまでの間には、こうした土公水神王といった語が息づいていた可能性が強いのである。土公水神王は、土公と水神の二者であるが、東方の言葉で二者を一体にしているのであって、区別されるべき二者が一体の神の如くに表現されていくことになるのである。

この五方五神の表現の中で四方、東・西・北・中央の諸神王が上下に正しく書かれているのに対し、南方土公水神王の名のみが天地逆書されて居り注目される。先の調査報告書では「井戸が住居の南側に位置したために意識的にそうしたのか、これを使用した人々の意識の中に南方土公水神王に対する特別な考え方があったためそう記したのか」と述べているが、実際には後者の指摘が正しいであろう。南方土公水神王は、『土公供次第』では「南方丙丁赤帝龍王」とされる。五行の司る所、南は星でいえば熒惑星に、卦では離に色では赤、神では朱雀に当り、五行では火に当る。火は水に剋されるものであり、鎮井の呪儀に当っては当然これを逆書することとなるのである。仮りに鎮竈の呪儀が行なわれるならば西方庚辛白帝龍王は五行で金に当るだけに火に剋されるため逆書されることとなるであろう。

こうした五方五帝は皿の中心に記され、その皿の口にそい圍線を墨で引き、その上に封の字を十二字、ぐるりとめぐらしている。封字は境立てをし、それより内を護持する場合と、それより外側を護持する場合に用いられるものである。例えば『百鍊抄』四に「天禄三年十月廿日、諸卿定申太宰府言上高麗国牒送事、太宰府可賜封符者」とあり機密に属する符を封緘したことも伝えているが、これは中なるものを護持するために封ずるものである。また、妖魅を筒に封じ呪縛して焼き流す例は後者、中に封じて外を護持する形である。こうした祝点から見るならば、この十二の封字が圍線―境立てに連なることは境の圍線から内なるもの、五方五神王を守護しようとする意図に出るものであることは論ずまでもないところであろう。

封字を連ねる呪符の実例としては、今も千葉県船橋市行徳の附近の道切り、辻切りの呪符がある。辻に長竹をたて、竹頭に山頭平尾の板符をとりつけ、符として

鬼火

鬼火 封 封 封
封 封 封



といった複雑な呪符をその板符の八方に書き、その行間に度脱苦衆生唯我一人といった句等を入れる複雑な符であるが鬼火を封じる一例である。一方、棟札や上棟の鎮札には、封字を四隅に記し内に寿句守りを納めた例は極めて多い。前者は内に封じて外を護り、後者は外区も封じて内を護るものと言えるであろう。こうした「封」字をもつ最古の遺例としてこの土師質の皿は重要なものといえるのである。

封字が十二字、五方五神王をとり囲むことの意義は何であろうか。棟札などでは封字は四字、各符の四隅に配されて居り四方の封である。また行徳の道切符は八方の封であり、本例は十二方の封である。十二方の封という時、考えられるのは、先述の十二月月に配された十二神が五方五神王を守護する場合、あるいは子丑寅卯辰巳……と配された十二支による十二方角・十二時刻の守護といった場合が考えられよう。恐らく十二方角を守護し、内なる五方五神王を守護するものであったとして支障はないであろう。

四

高槻市の阿久都神社南方の一井から発見された平安時代中期の墨書皿二枚について一応その内容を検討した。結果、天照大神王は太一星、皇天上帝の使であり十二神王は十二月神、五方土公水神王は五方五帝に通ずるものであることを知りえたのである。『土公供次第』には、こうした十二月神、五方五帝五龍王を謹請して土公祭を行なう様子を記しているが、本例は基本的には同じ基盤にたつて鎮井祭が執行されるものであることを示しているのである。言うまでもなく、本稿で使

用したテクスト『土公供次第』は天正十五年、高野山奥院灯籠堂の土公供実修の様を記したもので万治二年、天保五年と転写された新しいものであるが、この書と同時代には鎮井祭の神々も、土公祭―地鎮祭と同じ名に変化している可能性が強く、また、平安時代中期の地鎮め土公祭には二枚の皿に示される鎮井祭と同じ名の神々が謹請されたことも考えられるのである。

地鎮めのまつりと井鎮めのまつりは、殆んど共通する基盤をもつ。土公供次第に示される形の祭儀が両方のまつりに適用されたことが考えられるのである。地鎮めのまつりが径三尺、深さ二尺五寸の円穴を穿ち十二幣をたて、右側に五穀粥や切花、左側に水や酒を盛った長机を据え、円穴の前に枝花や香炉、打鳴をおく長机を配し、荒艸をしき敬礼するように、井鎮めのまつりでも、井戸を穿つ地にまず円穴を掘り周囲に斉串―幣串を挿し左右に同様長机を据え五穀粥や切花、酒水を饌し、手前の長机に支度の道具を配して敬礼したのであろう。ただ地鎮め―土公祭では、修し終えんと、「穴供物并幣串銀銭等修畢悉埋也、其上土カケテ能く能くカタル也」とあり、円穴の中に五穀粥や切花、酒水を盛る器から幣串・銀銭までが埋められるようであるが、鎮井祭の場合は、まつり終ると深く掘り方を掘り下げ、その井底で供物や幣串などを置き、またこうした墨書をもつ二枚の皿を配し、のち石を組み交して石組井が完成したのではないかと考えられるのである。桃核や櫛など辟邪の性格の強い品々が相伴しているのも、こうした井鎮めのまつりの日の供物であった可能性がつよいのである。

今回、高槻市清福寺町・阿久都神社の南方で発掘された一井から、井を穿つ際の井鎮め―鎮井祭を表わす資料が得られたが、その姿相は、まさに式占の神である十二神をも含み陰陽道の色彩のまことに濃い実態を示している。ただ、その中であって、天埜大神王といった大神王

の語を冠した特異な在り方が見られたり、五方五帝に対応する五方土公水神王といった神名があり、平安時代中期のこの地の陰陽道の浸透とその形態が鮮やかに浮かび上ってくるのである。

この二枚の皿は、その内に井鎮め―鎮井祭の祭場に謹請した諸神を書き納め、十二月神により厳封して、器内を神威のこもる空間とし、二枚を結紐して井底に置いたのである。天埜神王、十二神王、五方土公水神王はこの井の根原、まなことして息づいたに違いないのである。謹請した神名をこうした形で井底に置く例はいまだにない。稀有の例である。この井戸は壊れることなくその姿を我々の眼前に示した。恐らく神々の守護と安鎮の働きが続いたのであろう。人々がこの鎮井の諸神に背き、罪なり穢をもった時、この時こそ井を廃せざるを得ない時ではなかったかと私は想うのである。

(昭和五十六年九月二十日 稿了)

On the Inoshizume-Ceremony —the ceremony at digging a well—

Masayoshi MIZUNO

Summary

This paper deals with the brief for wells in the middle-Heian Period, especially the way of the ceremony at digging a well.

Two wooden plates were found at the bottom of the well excavated at the south of Acto shrine. There were the characters "天置大神王 (Tenkō Daisinnō) 十二神王 (Jyūni Sinnō)" in India ink on one plate. On the other plate, the characters "東方土公水神王 (Tōhō Dokō suisinnō) 南方土公水神王 (Nanpō Dokō Suisinnō) 西方土公水神王 (Seihō Dokō Suisinnō) 北方土公水神王 (Hoppō Dokō Suisinnō) 中央土公水神王 (Chūō Dokō Suisinnō)" circled with twelve characters of 〆封〆 and a line were placed on the center of the plate.

In this paper, we discuss on the characters of these gods and reconstruct the way of the ceremony according to the textbook 〆土公供次第〆 which represents the way of a ground-breaking ceremony.